

福島敏夫随筆集「乙戸南雑話【花鳥風月及び星・虹を愛でながら】」から主宰論説13

モン・サンミッシェルの見学記

フランスの建築の世界遺産にもなっているモン・サンミッシェルを訪れた。その時の紀行文である。モン・サンミッシェルは、イギリス海峡と大西洋に挟まれた北フランスのブルターニュ地方のフランス西海岸、サン・マロ湾上に浮かぶ小島に築かれた修道院であり、大天使ミカエルの3度のお告げを受けて、ノルマンディー大司教が築いたものらしい。モン・サンミッシェルは「聖ミカエルの山」の意で、旧約聖書にその名が記される大天使ミカエルのフランス語読みに由来するそうだ。北フランスの世界遺産の一つとして有名で、訪れる人も後を絶たない。今は、人口の橋でつながっているが、元々、最大干満差 15m以上という。このため、湾の南東部に位置する修道院が築かれた岩でできた小島は、かつては満ち潮の時には海に浮かび、引き潮の時には自然に現れる陸橋で陸と繋がっていたそうだ。満ち潮になると、沖合に 18km まで引いた潮が、猛烈な速度で押し寄せる。このためかつては多くの巡礼者が潮に飲まれて命を落としたといい、「モン・サンミッシェルに行くなら、遺書を置いて行け」という言い伝えがあったという。前日、フォーミューラー・ヴェールというホテルに宿泊することになったが、夕方、モン・サンミッシェルの遠景を眺めた。まさに奇巖城の趣で、よくこんなところに修道院が建てられたものだと、先人の情熱に敬意を表するとともに、その建設と日常生活も並大抵の苦勞でなかったろうとその労苦に感じ入った。このような場所に教会を築くためには、島の岩盤を囲む基礎部分が必要であり、2層に渡って建造物を設け、最上部の教会の層を支えるという3層構造になっているようだ。そのために、修道院建築の主要部はゴシック様式だが、内部はさまざまな中世の建築方式が混ざり合って構成されているようだ。教会堂は、フランク王国カロリング期の様式で、身廊はノルマン様式(11～12世紀)、百年戦争後の1421年に破壊されたロマネスク様式の内陣はフランボワイアン・ゴシック様式(15世紀半ば～16世紀初頭)として再建された。これら周囲を13世紀の重層構造の修道院建築と13～15世紀の軍事施設が取り囲んでいる。ゴシック・リヴァイヴァル建築の鐘楼と尖塔は1897年に完成し、その上に奉られた剣と秤を持つ黄金のミカエル像は彫刻家エマニュエル・フレミエによって製作されたようだ。深層部からは、岩山の上に幾層にもわたり建造され続けた建築遺構も残るそうだ。急な坂道の上り下りで、腰痛の持病のある我が身には、少々応えたが、名物のオムレツを昼食で頂くこともでき、土産物も入手できた。我田引水であるが、来てみて本当に良かったと思った次第である。

平成 24 年 6 月 24 日

短歌：回廊を散策しながら修道僧瞑想しつつ何思うかな

令和 2 年 12 月 4 日脱稿

その後、10年経過した。聞くところによると、景観及び自然保護の観点から、島に連なる陸橋は、撤去されたそうだから、また、日本の北陸地方にある日本海側の親知らず・小知

らず海岸の場合と同じく、引き潮時に現れた砂地を急いで渡ることになるのであろうか。

自由短歌：

引き潮で行くは良いけど帰りは怖いそれでも行きたし巡礼者

令和7年12月14日追記

モン・サン・ミシエルは、今も人気のある北フランスの観光地で、訪れる人も多いようだ。ただ、もともとの歴史的背景を、思い起こしてみるのも、大切かと思われる。

山茶花と椿

山茶花と椿は、花の形は似ているが、生育状況も開花時期もかなり違うようである。どちらも、日本原産であるが、山茶花が秋から冬にかけて咲くが、椿は、冬から春にかけて咲く。山茶花は、生垣で集まって花をつけるのをよく見かけるが、椿は、公園などの地面に一本木として花をつける。乙戸南公園を散歩していて、椿の花が盛りであることに気づいた。春は、梅・桃・桜が観賞用に有名であるが、椿も、結構味わい深い。紅椿と桃椿の木が2本並んでいて、それぞれの花をたわわにつけていたが、根本には、落下椿が、びっしりと地面を覆っていた。もともと、「寒椿」といわれるように、椿は、2月の寒い時期に咲く花である。椿の色は、紅白だけかと思っていたが、桃色の椿もあるのかと思うと、感慨深い。日本の到るところで生息し、県花や市花になっている場合もあるようだ（ちなみに、松山市の市花は、椿である）。また、一般的には、一重咲きだけでなく、八重咲きのものもあることを知った。椿は、花びらひとつひとつでなく、花ごとばさりと落ちる。そのため、江戸時代、不吉な花とされ、武士の家では椿の木は植えなかったという。おそらく迷信で、結構武士の家でも植えられて、その美を鑑賞したものと思われる。同種の花である山茶花との見分けが難しいといわれるが、良く見れば、その違いが分かる。

平成 24 年 4 月 20

自由俳句：

くれないに地面を隠す椿かな

令和 2 年 12 月 6 日

いつもの乙戸南公園の周りの散歩中、この2～3日で、近くの民家の生垣の山茶花の花が満開になっていることを知った。見たのは、紅花だったが、白花もあるらしい。「たきび」の童謡にも出てくるが、この花が咲くということは、もう冬の到来であると気付く。

自由短歌：

山茶花のくれないの花も咲き誇る師走の風に吹かれつつ

令和7年12月14日追記

『たき火』という唱歌が思い出される、木枯らしの季節であるが、山茶花の開花が遅くなっているようである。暖かい夏日が続いているせいかもしれない。急激なステップ応答的な寒さも、必要なかもしれない。